一八八四年十二月十四日（日）

タクール、聖ラーマクリシュナ、〝プラフラーダの生涯〟の芝居を見物

聖ラーマクリシュナの三昧境

聖ラーマクリシュナは今日、スター劇場（シアター）に来ておられる。〝プラフラーダの生涯〟という芝居を見物なさるためである。お供は校長、バブラーム、ナラヤンの三人。スター劇場（シアター）はカルカッタ市内ビードン街にあり、後にこの劇場はエメラルド劇場（シアター）やクラシック劇場（シアター）と名を変えて芝居が上演された。

今日は日曜日。オグロハヨン月三十日、黒分十二日目。西暦一八八四年十二月十四日。

タクール、聖ラーマクリシュナは、さじき席に北向きになって坐っておられる。場内は明るく照明されている。そばに校長とバブラームとナラヤンが坐っている。ギリシュ・ゴーシュが来た。芝居はまだ始まっていない。タクールはギリシュと話をしていらっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「（ニコニコして）――ワァー！　お前はホントにいい芝居を書くねえ！」

ギリシュ「先生、本当のところは何もわかっておりませんのです。ただ、夢中で書いているだけでございまして――」

聖ラーマクリシュナ「いやいや、お前はちゃんとわかってるよ。この間もお前に言ったはずだが、ちゃんとした信仰を持っていなければ、神像の下絵は描けないからね。とにかく、深く理解することが必要だよ。

以前にケーシャブの邸へ、〝新しきブリンダーヴァン〟という劇を見物に行ったことがある。長官代理が来ていてね――八百タカも月給をとっているそうで、しかも大へんな学者だということだ。ところが、その人は小さい息子をつれてきていて、まァ大騒動なんだよ！　自分の息子をどこに坐らせようか、どこに坐らせたら芝居がよく見えるだろうかというわけで、セカセカ、そわそわしてばかりいるんだ！　こっちで神様の話をしているというのに、耳に入るどころじゃない。また、その子供が、『パパ、これはナァニ？　パパ、あれはナァニ？』なんて聞いてばかりいるし――。閣下は子供にかかりっきり、というわけさ。

ああいう人はね、本をたくさん読んだだけで、本当は何もわかっちゃいないんだよ」

ギリシュ「私もつくづく思うんですが、どうしてこんなにも劇場の仕事に追いまくられているんだろうかと――」

聖ラーマクリシュナ「いや、お前はそれでいい。お前の仕事は多くの人のためになるからね」

芝居が始まった。プラフラーダが学校に勉強しに来た。その姿を見て、タクールはやさしい声で、「プラフラーダ、プラフラーダ」とおっしゃったまま、深い三昧に入られた。

プラフラーダが象に踏まれる場面と火に投げこまれる場面で、タクールは声をあげてお泣きになっ

た。

ゴーローカの神殿で、ナーラーヤナ大神(ヴィシュヌ神の一名)と、妃神ラクシュミー(ナーラーヤナの妃神、富の神)が鎮座しておられる。大神はプラフラーダのことをさかんに心配していらっしゃる――その場景(シーン)で、タクールは再び三昧にお入りになった。(訳註、プラフラーダ――悪魔ヒラニヤカシプの息子であるが、ヴィシュヌ神を熱心に崇拝し修行を重ねた結果、ついには解脱に達したとされる。インドでは信仰者の鑑(かがみ)とされている)

信者たちと神の話

〔見神の特徴(しるし)とその方法――信仰者の三つの等級〕

芝居が終わると、ギリシュは自分の部屋にタクールをご案内した。

ギリシュ「次に、〝結婚したらてんやわんや〟という芝居が始まりますが、ごらんになりますか?」

聖ラーマクリシュナ「いやだよ、見ないよ。〝プラフラーダの生涯〟を見たあとで、そんなもの見られるかい?

わたしはいつか、オリッサから来たゴパール一座の座長にこう言ってきかせた――『芝居の終わりには、何か神についての言葉を話すようにしろ』とな。神様の言葉をずーっと聞いたあとで、〝結婚したらてんやわんや〟だなんて――。そりゃ、俗世間の話じゃないか。逆戻りだよ。前の気分に戻ってしまうよ」

タクールはギリシュと神についてのお話をなさった。

ギリシュ「ところで先生、今日の〝プラフラーダの生涯〟は如何でございましたか？」

聖ラーマクリシュナ「全部、あの御方が演っていなすった。女の役をした人たちはみんな、宇宙の大実母だった！　ゴーローカの牛飼いになった人たちは、ナーラーヤナご自身だった。あの御方が全部の役者になっていなすったよ。

だが、本当に神を見たかどうか、見分ける特徴があるんだよ。第一の特徴は、いつも朗らかで楽しそうだ。物怖じや遠慮をしない。海のようで――表面は波立ったり音をたてたりするが、下の方は底知れぬ水だ。神を見た人は気狂いみたいに見えることもあるし、食屍鬼のように見えることもある。浄、不浄の区別がつかなくなるからね。時によると、知覚のないバカみたいに見えることもある。なぜって？　内にも外にも神ばかりだから口がきけなくなるんだ。小さい子供のようにもなる。無邪気で、何も気にかけず、着物を脇にかかえて裸でブラついている。それから少年のようにイキイキして挑戦的だ。いつまでも青年のように若々しくて、仕事をしたり人に何か教えるときはライオンのようだ。

人間には自我意識があるから神が見えない。雲がかかっているから太陽が見えない。だが、見えないからって太陽がないわけじゃない。太陽はちゃんとあるんだ。

でも、〝子供の私〟には害がない、むしろ役に立つ。菜っ葉を食べるとお腹がゆるくなるが、沼菊菜（ヌマキクナ）なら胃のためにいい。沼菊菜は菜っ葉の仲間じゃないからね。氷砂糖は菓子の仲間じゃない。ほかの甘い菓子は体に悪いが、氷砂糖は咳に効く。（訳註、シャーク――葉物野菜全般を指す。ヒンチャ・

シャーク――湿地に生える多年草で、和名は沼菊菜(ヌマキクナ)。どこにでもあっておいしく、身体にもよい)

だから、いつかケーシャブ・センに、『これ以上のことを話したら、あんたは団体を維持していけなくなるよ!』と言ったとき、ケーシャブがギョッとしたので、〝子供の私〟か〝召使いの私〟ならあってもかまわない、と言ったのさ。(訳註――一八八三年七月二十二日『コタムリト』参照のこと)

神を見たお人は、神ご自身が生物と世界になっていなさることがよくわかる。あらゆるものは、あの御方なんだ。こういう人を高級の信者というんだよ」

ギリシュ「ははは……。すべてがあの御方――。しかし、ホンの少し〝私〟が残っていて……咳(セキ)に効(き)くというわけでございますか」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハ……。そうなのさ。それには害がないのさ。その〝私〟で神様と楽しむんだよ。〝私〟と〝あんた〟が別になっていてこそ、二人で楽しむことができるというものさ。――主人と召使い、師と弟子、というぐあいにね。

それから中級の信者というのもある。その人はね、神はあらゆる生物の中に内なる導き手(アンタルヤーミン)として宿っていなさる、と思っているんだ。低級の信者は――神は在(いま)す、あちらの方に――大空の彼方に、と言う(一同笑う)。

ゴーローカの牛飼いを見て、あの御方が演(や)っていなさることがはっきりわかったよ。神を見たお人は、神ひとりが行動者(カルター)で、あの御方だけがすべてのことを為(し)ていなさるのだということが、はっきりわかる」

ギリシュ「先生、私も近ごろ、あの御方だけがすべてのことをなさるのだということが、よくわかってまいりました」

聖ラーマクリシュナ「だからわたしは、いつもこう言っている――『大実母（マー）よ、わたしは道具、あんたが使い手。わたしは動かざる存在（もの）、あんたが意識を通わせている。あんたのさせる通りにわたしはする、言わせる通りに言う』と。

無智な人たちはこんな言い方をする。『これこれは私がした。あとのこれこれは神様がした』」

〔カルマ・ヨーガで心（チッタ）を清める――なぜ、罪、罪と繰り返す――無条件の信仰（バクティ）〕

ギリシュ「先生、私は、さして何もしていません。なのにどうしてまだ、こんなに仕事（カルマ）をしなければならないのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「仕事をするのはいいことさ。土地が耕してあれば、どんな種を蒔（ま）いてもよく育つ。だが、仕事は結果を期待しないですることだ。

覚者（パラマハンサ）には二通りある。智（ジュニャーナ）の覚者と愛（プレーマ）の覚者だ。智の覚者は自分に集中する。自分が悟ればそれでいいんだ。シュカデーヴァのような愛の覚者は、神を覚（さと）った後で多くの人を導いて下さる。

自分だけマンゴーを食べて、口を拭いて知らん顔をしている人もあるし、みんなに分けて食べさせてやる人もある。井戸を掘る時、モッコやシャベルを持ってくるが、井戸が堀り上がったらそんな道具を井戸の中に捨ててしまう人もいるし、近所の誰かが後（あと）で使うかも知れぬと、片付けてとっておく

人もある。シュカデーヴァのような方々は、後の人のためにモッコやシャベルをとっておいて下すったんだよ。お前さんもそうしたらどうだい？」

ギリシュ「はい。どうぞ私を祝福してくださいませ！」

聖ラーマクリシュナ「お前、大実母(マー)の名を信じろ。すべてがうまくいくよ」

ギリシュ「でも、私は罪びとでございます！」

聖ラーマクリシュナ「罪だ、罪だ、と年中言っている間抜け(バカ)が、ほんものの罪人になってしまうんだよ！」

ギリシュ「先生、私の坐った場所(ところ)は不浄な場所でございます」

聖ラーマクリシュナ「何を言うんだか！　千年の間、真っ暗闇だった部屋にランプが入れば、少しずつ明るくなると思うかい？　ちがう。いっぺんにパーッと明るくなるんだよ」

ギリシュ「あなた様は祝福をおさずけくださいました！」

聖ラーマクリシュナ「お前さんが心からそう思うんなら、もう何も言うことはない。わたしは食べて、飲んで、あの御方の名をとなえているだけのことだ」

ギリシュ「真実の信仰がまだ持てておりませんので、それを授けていただきたいのでございます」

聖ラーマクリシュナ「わたしがかい？　ナーラダやシュカデーヴァのような賢者たちならできるかも知れないが――」

ギリシュ「ナーラダたちには、会うことが出来ないではありませんか。あなた様は目の前にいらっ

しゃいます」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ。よし、よし、信じていろ！」

しばらくの間、一同は沈黙していた。やがてまた、会話がはじまった。

ギリシュ「私のたった一つの希いは、無条件の信仰を持つことでございます」

聖ラーマクリシュナ「無条件の信仰を持っているのは神の化身だ。ふつうの人間は持てない」

皆、黙ってしまった。タクールは恍惚とした表情で歌をうたい始められた。上方の一点に視線を釘づけにして――

大実母の財宝を得る難しさ
おろかな心にわかりゃせぬ
シヴァの神さえ　苦行の末に
やっと御足を抱くものを

天界の財宝も　楽しみも
大実母を想えば　とるにも足らず
大実母の恵みのまなざしで
歓喜の海にひたりきる

すぐれたヨーギーや　尊いムニの
禅定さえもとどかぬ御足
徳なき　おろかな一人の男
ぜひ抱きたいと憧(あこが)れる

ヨーギー――ヨーガの行者、ムニ――悟りを開いた聖人

ギリシュ「徳なきおろかな一人の男が、マーの御足にあこがれる！　あァ」

見神の方法――夢中になること

聖ラーマクリシュナ「(ギリシュに向かって)強い離欲ができれば、あの御方をつかむことができるよ。命がけにならなきゃだめだ。

弟子が師に、『どうすれば至聖(かみ)にふれることができますか?』と聞いた。師は、『私についておいで――』と言って池につれて行った。そして、弟子の頭を水の中に突っこんで押さえつけた。しばらくたってから、水から頭を出してやって、こう聞いた――『お前、水の中でどんなぐあいだったね?』弟子は答えた。『どうもこうもありませんでした。ただもう、必死になってもがいていました』

師は言ってきかせた。『ホラ、そんなぐあいにお前が至聖(かみ)を求めて必死になれば、必ずあの御方をつかむことができるよ』と。

だから、いつも言うことだがね、三つの引力を一つにまとめて集中すれば神をつかめる、と。つまり、世俗の人が自分の金や財産に惹かれる気持ち、妻が夫に惹かれる気持ち、母親が子供に惹かれる気持ち、この三つの愛情の力を一つにまとめて至聖（かみ）に捧げることができたら、そうすりゃ、たちまちあの御方に会えるさ。

心をこめて呼んでごらん
大実母（シャーマ）はきっと来てくれる！

無我夢中になって呼べば、あの御方は会って下さるに決まってるんだよ」

〔智慧のヨーガと信仰のヨーガの調和――現代（いま）はナーラダのような信仰〕

「いつかお前に、信仰とはどういうものか話してきかせたね。体と心と口であの御方を崇めることだ。体で――つまり、手を合わせて拝んだり、お仕えしたり、足であの御方を祀ってあるところに行ったり、耳でお経や称名の声や讃歌（キールタン）を聞いたり、目で聖像を拝んだりすることだ。

心では――常日頃、あの御方を瞑想したり、あの御方の活動（リーラー）について深く考えたりすること。

口では――つまり、称名したり、讃歌（キールタン）を歌ったりすること。

現代（いま）のような末世（カリユガ）では、ナーラダのような信仰が一番いいと思うよ。いつも称名したり讃歌を歌う

ことだ。そんなヒマのない人たちは、せめて朝夕二回、心をこめて手を拍(う)ちながら、〝ハリボロ、ハリボロ(ハリの名となえよ)〟と、称(とな)えることだ。

神の信者としての〝私〟は、我執高慢にならない、無智にならない。それどころか、むしろ神をつかむのに役に立つ。この〝私〟は、私の中に入らない。沼菊菜(ヒンチャ・シャーク)(ヌマククナ)が菜(シャーク)っ葉のうちに入らないようにね。ほかの菜(シャーク)っ葉は食べるとお腹をこわすが、沼菊菜(ヒンチャ・シャーク)を食べると余計な胆汁が出なくなって体のためになる。氷砂糖は菓子の仲間に入らない。ほかの甘いものは体によくないが、氷砂糖は胃酸を中和する。

堅信(ニシェタ)のあとが信愛(バクティ)だ。信愛(バクティ)が熟してくるとバーヴァになる。バーヴァが高まってくるとマハーバーヴァになる。最後が恋慕(プレーマ)だ。

プレーマは紐(ひも)のようなものだ。プレーマによって神は信者にしばりつけられて、もう逃げ出せない。

普通の人はせいぜいバーヴァまで——。神の化身(アヴァターラ)でなくてはマハーバーヴァやプレーマの状態にはならない。チャイタニヤ様(デーヴァ)はそこまで達しなすった。

それから、智識のヨーガというのはどういうものか知っているかい？　あれは自我の本性を知(さと)る道だ。ブラフマンこそ自分の本性だと知ることだ。

プラフラーダは自我の本性に安住している時もあったし、神と私は別のものと見ていた時もあった。その時は信仰者(バクタ)になっていたわけだよ。

それから、ハヌマーンはこう言っていたね——『ラーマよ！　あなたが全体で私はその一部分と私

は見る時もあります。また、あなたが主人、私は召使いと見る時もあります。そしてラーマよ、第一原理（タットヴァ ジュニャーナ）に住した時は――その時は、あなたは私、私はあなたになります』」

ギリシュ「ああ！　でも世間で暮らしていて、神をつかむ希（のぞ）みが持てるものでしょうか？」

〔世間にいて神がつかめるか？〕

聖ラーマクリシュナ「世間にいてできないということはないよ。だが、識別（ヴィヴェーカ）と離欲（ヴァイラーギャ）がどうしても必要だ。

神だけが実在、ほかのものは皆、一時的なもの――二日ばかりのもの。これをしっかり実感できないといけない。浅い所に浮いていてバシャバシャやっていてはダメ、深く潜りこむことが大切なんだよ！」

こうおっしゃって、タクールは歌って下さった――

沈め　沈め　沈め
美しき海に　わが心よ
深き底にゆきて探せば
聖愛（あい）の宝玉（たま）　きみを待つなり

探せ　探せ　探せ
さがせ　汝(な)が胸の神のふるさと(ブリンダーヴァン)
ともせ　ともせ　ともせ
智慧の灯(ひ)を　常に明るく

聖ラーマクリシュナ「それからもう一つ注意しなければいけないのは、ワニにくいつかれないようにすること」

ギリシュ「私は、死ぬことは少しも恐ろしくございません」

聖ラーマクリシュナ「いや、色欲というワニの危険があると言っているのさ。だから、ウコンの汁を体に塗って海にもぐることだ。識別(ヴィヴェーカ)と離欲(ヴァイラーギャ)がウコンの汁なんだよ!

世間にいて智慧を得る人もいくらかいるよ。だから、ヨーギーには二通りあるんだ。隠れたヨーギーと顕(あらわ)れたヨーギーだ。世間の生活を捨てた人たちは顕れたヨーギーで、誰でも一目でわかる。隠れたヨーギーは外から見てもわからない。女中が一生懸命に家の仕事をしていても、心はいつも郷里(くに)にいる子供たちのことを思っているようなものでね。それから、いつかお前にも言ったように、不貞な女が家事に励んでいても、心はいつも情人のことを思っているようなものだ。識別と離欲を実行するのはとても難しい。〝私が為(し)ているんだ〟〝これは皆私のものだ〟――この感じはなかなかなくならない。いつか、八〇〇タカも月給をとっている長官代理を見たが、神さまの話が出ているのに、それには全

く関心がないんだよ。小さい息子をつれてきていて、坐らせるのにここがいいとか、あそこがいいとか大忙しなんだ。それから、もう一人知っているよ――名前は言わないがね。熱心に称名をつづけている人なんだが、一万タカの金のために裁判所でウソの証言をした。だから言うんだよ。識別と離欲ができれば、世間にいても神を覚れる、とね」

〔罪びと、悩める者、聖ラーマクリシュナ〕

ギリシュ「この罪深い人間はどうなるのでしょうか？」

タクールは目を上方に固定して、大そう慈悲深い声音で歌をおうたいになった――

想え、聖なる美しき愛人を
人の姿をしたあの御方
死も恐怖も滅し給うハリを
深く　ふかく　深く　瞑想せよ
それを想えば　この世の悲苦から解放たれ
直ちに生死の大海を渡らん

想え、この世に生まれ来し理由を

よこしまな思い、悪しき行為を
いたずらにつづけて何の益がある
そは行くべき道に非ず、今ざんげして
この永遠の真理を、永遠の愛人を
深く　ふかく　深く　瞑想せよ

(ギリシュに)――〝直ちに生死の大海を渡らん〟――。

〔アディヤシャクティ、マハーマーヤーの礼拝と代理権〕

「マハーマーヤーが戸口から退いてくれるとあの御方に会える。それにはマハーマーヤーのお慈悲が要る。だから、シャクティを拝むんだよ。そうだろう、すぐそばに至聖さまがいなさるのにそれがわからないのは、間にマハーマーヤーがいなさるからだ。ラーマとシーターとラクシュマナが歩いていた。先頭がラーマ、中がシーター、一番後ろにラクシュマナ。ラーマから二、五ハト(約1m)しか離れていなかったのに、ラクシュマナにはラーマが見えなかった。

あの御方を拝むのには、一つのきまった態度をとらなけりゃいけない。わたしは今まで三つの態度をとってきたがね――子供の態度、女召使いの態度、それから女友達の態度と――。召使いと女友達の態度をずい分長い間とってきた。その当時は、装飾品を着けて女と同じ服装をしていたものさ。子

供の態度をとるのはとてもいいことだ。（訳註、女友達の態度――〝ゴーピー（牛飼いの女）〟に代表される態度）

勇者の態度はよくない。ネダとネディ（剃髪したヴィシュヌ派の男女）やバイラヴァ（シャクティ派の男性行者）、バイラヴィー（女性行者）なんかは勇者の態度を用いている。つまり彼らは、プラクリティを女とみなして、性交によってこれをなだめて喜ばそうとするが、これは大ていの場合堕落する」

ギリシュ「私も一時期、その方法をとったことがあります」

タクール、聖ラーマクリシュナは、心配そうにギリシュをごらんになった。

ギリシュ「私には、どうもそういう傾向があるのですが……。これから先、どんな方法をとればよいかお教え下さい」

聖ラーマクリシュナ「（少し考えた後で）――あの御方に代理権を差し上げてしまえ。あの御方のしたいようにしていただくんだ」

サットヴァ性が出てくれば神がつかめる――サッチダーナンダかカーラナーナンダか

聖ラーマクリシュナは青年信者たちの話を始められた。

聖ラーマクリシュナ「（ギリシュに向かって）深い瞑想に入っていると、あれたちの性格がよく見えるんだよ。〝家庭を持つ〟という気持ちは、あれたちにはない。女と楽しもうという望みも持っていない。妻を持っている者もいっしょに寝ないでいる。――わかるかい？　ラジャス性がなくなって純粋なサットヴァ性が出てこなければ、あの御方にじっと心を向けることはできないし、あの御方を

恋い慕う気持ちもわいてこない。だから、あの御方をつかむことなんて出来やしない」

ギリシュ「あなた様は私を祝福して下さいました！」

聖ラーマクリシュナ「そうかい！　心から真剣になれば成功するだろう、と言っただけだよ」

話しておられるうちに急に、「アーナンダ・マイー！　アーナンダ・マイー！」と言っているうちに、そのまま三昧に入られた。（訳註、アーナンダ・マイー――〝歓喜の女神〟の意、大実母の別名）

かなり長い間三昧状態でおられたが、少し平常に戻られて、「あいつらはどこだ？」とおっしゃる。校長はバブラームを呼んできた。

タクールは、バブラームはじめ信者たちの方をいつくしむように眺めながら、恍惚としておっしゃる――「サッチダーナンダはいいね！　カーラナーナンダは？」（訳註――サッチダーナンダは、「実在（サット）、智慧（チット）、歓喜（アーナンダ）」よりなる宇宙の本質、ブラフマンの実体。カーラナーナンダは、〝根元の喜び〟の意）

そして、歌をおうたいになった――

こんどこそ私は、はっきり理解（わか）った
よく知っている人から〝この世の秘密〟を教えてもらった
夜のないあの国から一人の男がきて
それから私にはもう昼も夜もなく
日毎の勤行（つとめ）にも用はなくなった

眠りは破られ、もう二度と眠りはしない
ヨーガに入って、常に目ざめている
マーよ、私はヨーガ三昧に入り
眠りを眠らせてしまったのだ

硼砂（ほうしゃ）と硫黄（いおう）をとりまぜて
私は永遠の色を得たのだ
この両の目で、我が心の寺院の床を塗ろう

プラサードは言う――
私は信仰（バクティ）と解脱（ムクティ）の両方に頭を下げる
カーリーはブラフマンに不異（おなじ）と知って
正（ダルマ）と不正（アダルマ）のすべて捨てる

次の歌

硼砂（ほうしゃ）と硫黄（いおう）――塗料を定着させるのに用いる

プラサード――インドの詩人、ラームプラサード

1884年12月14日(日)

ガヤー、ガンガー、プラバースや
カーシー、カーンチーに行かずとも
カーリー　カーリー　カーリーと呼んで
わたしゃ最期の息をひく

朝、昼、晩にカーリー呼べば
祈祷(いのり)も勤行(つとめ)も要(い)りはせぬ
勤行(つとめ)はあなたのそばまで行くが
決して一体(いっしょ)になりはせぬ

慈善、誓願、賜(おく)りもの
そんなものには目もくれず
この世の愛をひとまとめ
大実母(マーリー)の御足に捧げよう

カーリーの御名の不思議な力
それは誰にもわからない

この五つはいずれもヒンドゥー教の聖地

あなた＝神

神のなかの大神シヴァさえも
御名の光栄を讃えます

音楽の神も裸足で逃げだすのではないかと思われるほど、タクールの声調は絶妙でいらっしゃる。一同は魂までもしびれて聞きほれていた。

聖ラーマクリシュナ「わたしはマーにお祈りするとき、こう言ったよ――『マー、ほかにわたしは何もいらない、純粋な信仰心だけをおくれ』とね」

ギリシュの静かな落ち着いた態度を見て、タクールは大そう満足なさった。

聖ラーマクリシュナ「お前のその態度はいいよ。素直な態度（サハジャ）は最上の境涯だ」

タクールは劇場の支配人の部屋に坐っておられる。一人の職員が入ってきた。

劇場の職員「〝結婚したらてんやわんや〟をご覧になりませんか？　今、演っておりますが――」

タクールはギリシュにおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「何てことをしたんだ？〝プラフラーダの生涯〟のあとに〝結婚したらてんやわんや〟だって？　先においしいパヤス（乳粥）を出しておいて、その後に苦い料理だなんて！」

（訳註――ベンガル地方では料理を出す順番が決まっていて、最初に前菜などの苦い料理を出して、最後にデザートとして甘いものを出す）

〔聖ラーマクリシュナ、慈悲の海と売春婦〕

芝居が終わると、ギリシュの指示で女優たちがタクールにごあいさつをするためにやって来た。彼女たちは一様に床に額(ぬか)ずいてタクールを拝した。信者たちは、ある者は立ったまま、ある者は坐ってそれを見ていた。女優たちのうち何人かがタクールの足に手をふれて拝んでいるのを見て、信者たちは驚いた(訳註)。タクールはそれに対して、「お母さん、もういい、もういいよ。お母さん、もういいよ、もういいよ」と、やさしい声でお止めになった。

彼女たちがあいさつをすませて出て行くと、タクールは信者たちにおっしゃった――「ひとり、ひとり、みんなあの御方だ――いろんなお姿のね」

やがて、タクールは馬車にお乗りになった。ギリシュはじめ劇場の人たちは馬車のところまで行き、お見送りした。

馬車に乗るとすぐ、タクール、聖ラーマクリシュナは深い三昧に入られた！

校長やナラヤンたちも、お伴をして馬車に乗った。

タクールと弟子たちを乗せた馬車は、冬の夜道を南神村(ドッキネーショル)に向けて出発した。

（訳註）その当時のインドでは、身分の卑しい女性（売春婦なども）が芝居などの演技をしていた。ギリシュの芝居を演じていた女優も例外ではないと推測される。だから、タクールがそんな女性たちに足をふれさせたことを信者たちは驚いたものと思われる。一八八四年に演じられた〝チャイタニヤ・リーラー〟で六才の時にデビューした女優、ターラースンダリー（ターラー）の手記が参考となるので一読されたい。（日本ヴェーダーンタ協会刊『永遠の伴侶／スワミ・ブラマーナンダの生涯と教え』〝追憶、ターラー〟）